

2019.10.28

学校評価委員会議事録

実施日 令和元年 10 月 19 日

校長 挨拶、本日の進行について

1) 組織変更

岩瀬 1日5時間、週20時間授業を持っている。その後、学生指導を行っている。
意識の違いがある。共同体制になっていない。

前田 教員とは常勤を指しているのか。また、非常勤の教員も学校評価を行っているのか。

校長 教員とは非常勤も含む。非常勤の意見は学校評価には取り入れられていない。非常勤とは職員室・ES職員以外。

前田 学校評価も含め、非常勤の意見も取り入れるべき。

伊藤 カリキュラムの変更後うまくいっていない。誰かがやっていたらよいという、他力本願的な面が見られる。組織で働くとはどういうことか再度考えてほしい。

2) 入試改革

校長 本校の入試はほぼ数学の点数で合否が決まる。

岩瀬 これから本校が目指す学校教育目標を校長から示してほしい。その方針に従い入選の指針、教育課程を作りあげていく。学生の基礎学力不足で現行のカリキュラムに追いついて来れない学生が多く出ている。現在、緑地系学科は全入となっており、優秀な学生は大学に進学することから、今後もこの傾向が続くと考えられる。学力不足の学生が入学して来ると、現状カリキュラムでは対応できない。

阿部 2年制の土木科の学生は、一般学生の他に企業委託生、公務員志望の学生と進路目標の異なる学生が同じカリキュラムの下学校生活を行っている。このような状況で学生指導を行うことは難しい。

前田 一般学生と企業委託生ではどちらが優秀か。

校長 以前は、企業側から送られて来たという意識を持つ学生が少なくなく、学習にも身が入らない状況であったが、近年ではこのような学生が減り、優秀な学生も多い。

下原 入社後、学校に入るまでの企業側による意識づくりが大切である。

伊藤 時代や学生の質の変化で、校長としても方針を示しかねている。誰が見ても本校の学習には付いて来れないであろう、という入学希望生はダメとしても、学校としての大義名分を明確にし企業に伝えれば、企業側もそれを汲み取り一定の質を備えた入学希望生を送ってくれる。

校長 このことは企業にも伝えており、徐々に浸透している。しかし、新規で送ってくる企業は理解不足によるミスマッチも有る。

- 伊藤 入試改革ではなく、カリキュラムの在り方が重要。入試制度の変更は必要ない。
- 前田 定員を満たすことも重要であるが、委託生を多く受け入れることで定員オーバーとなり、学生と教員からも不満が出てはならない。
- 校長 今年度は現時点で施工科が定員をオーバーしている。多くの学生が入学しても学習に支障を与えないように、不足する資材リストを提出するよう指示している。
- 下原 この学校は、どのような学生でも入学させ定員を満たせば良いという校風にはない。地方の企業では、これまで入社させていた専門高校生を採用することが難しくなり、地元の普通科から採用し、本校へ送り込む傾向が今後も続く。本校教育の質を維持するためにも全て受け入れることなく、入り口で見極めることが重要。しかし、道内の建設業は、今後 5 年間は伸びていく見通しであり、その後も急な落ち込みは無いと思われるため、これを支えるために地方の建設業を担う若手技術者の養成もまた、本校の使命である。そのためには、明らかな教員不足を解決するために ES 社員に授業を支援していただくことや、建設協会等からのバックアップをいただくことも可能である。さらに若い人材を入れて、教員として育てることも重要である。ES 社員が営業中の会話の中で学校の話が 3 割ほど占めているようだ。ES と学校は両輪で進んでいかなければならない。
- 阿部 地理院が示す測量教育専門課程の条件を満たすためには、専任教員が 3 名必要とされる。今後の退職者を考慮すると数年で必要条件を切ってしまう状況にある。条件を満たせず、新潟の専門学校では認定校を外されている。

3) 教育目標の設定

- 岩瀬 基礎学力不足の学生は、学習のみならず団体の中で作業することも困難である。このような学生からは、現在のカリキュラムの在り方について不満の声が漏れている。
- 下原 そのような学生に合わせていたら教員が何人いても足りない。しかし、入学生を絞り、1 名でも学科を継続するという事は、経営的に成り立たない。選択制などを取り入れて土木科と併せた教育課程を模索するなどの手段が求められる。
- 岩瀬 入学生の下限をどこに置くかは、学校の教育方針により決まってくる。
- 前田 当別高校からの入学生はいるか。
- 校長 過去にはいたが、いずれも学習についていけるレベルの学生ではなかった。
- 岩瀬 学科としては、多少学力不足であってもやる気が有れば育ててゆきたい。
- 前田 造園科では、何年ほど入学者数が 1 桁代なのか。
- 岩瀬 5 年間。
- 前田 学生も教員も疲弊しては、学校は成り立たない。今後の見通しを土木科と造園科の統合も含め検討してほしい。

II ①② は意見なし。

III ⑬

下原 教員採用計画において、現在はどのような活動をしているか。

校長 ハローワーク、大学訪問、私的縁故から依頼を行っているが明確な回答はない。ESの方にも適任者がいればお願いしたい。

下原 早めに依頼をかけたい。藤永先生には持ち教科数を増やすようお願いしている。皆木先生には木本先生への引継ぎをお願いしている。

松本 教員は有資格者にこだわって採用するのか。そうであれば応募者はない。資格は無くても若い人材を採用し長期計画により育成すべき。その繋ぎを担う役割として退職者に授業をお願いするという姿勢が無ければならない。

下原 なぜ委託生が増えているかは、企業として有資格者を増やしたいからであり、企業は若い有資格者を手放すことはあり得ない。

4) カリキュラム編成 (別紙より)

前田 教育課程表上、なぜ地盤を別立てしているのか。

阿部 過去にジオコースがあった名残。(改善する。)

下原 公務員合格者の中に、女子学生はいるか。

校長 今年はいない。

古城 国が進める「女性が輝く社会づくり」その施策に則り女性の採用1名に対し、男性3名しか採用できない。全採用数を増やしたいが女性が少ないために採用できない状況にある。

阿部 開発局に入り1~2年で退職している学生がいる。公務員としての資質に欠ける学生を無暗に送り込むと、開発局に迷惑をかけることになる。

古城 過去は開発局の労働環境も厳しい所があったが、近年は改善している。学校で精査せず希望者は是非送り込んでほしい。その後の教育はこちらが行う。

下原 地方の高校では、卒業生が公務員に成ったことに大きな喜びを感じている。ここをもっとPRし、入学生の増加を図ると共に、益々公務員の合格者増に努めてほしい。

前田 造園科ではボランティア活動を行っていると記載が有るが、造園科のみの活動にとどまらず、全校で行ってほしい。例えば石狩浜に漂着するマイクロプラスチック拾いなどを行い、この活動が学校の目玉となるよう進めてほしい。

下原 校長が技術者育成プラットホームに参加するが、その内容を教えてほしい。

校長 教育内容、進路、校内活動等の学校紹介を5分程度で行う。

下原 この会には多くの企業や業界関係者が集まる。学校理解者を増やすことのできる良い機会としてほしい。

岩瀬 学校教員としても、学科運営等を考えるとき学校の財務をある程度把握していないと正しい判断ができない。

伊藤 財務については企業会計と学校法人会計を別途公開している。